

日本庭園における灯籠のデザインとその意義

林 秀 樹

1 , 石灯籠は日本庭園には必須か

島根の出雲庭園を見て歩くごとに、「日本庭園には灯籠はつきものだ。」と思い込んでしまう。それほど、出雲庭園には、多くの灯籠が配置されている。

しかし、私の勤務地である益田市の代表的な庭園である雪舟庭園を訪ねると、庭園に灯籠は見当たらない。室町時代、雪舟作との伝承があり、国指定の文化財となっている万福寺と医光寺の庭園には灯籠がないのである。



3つの灯籠を配置した「木佐本陣庭園」



灯籠が1基もない 益田「万福寺 雪舟庭園」

2 , 日本の灯籠の歴史は

灯籠とは何かということ調べてみると、灯籠の起源は、仏教の献灯を起源とするものらしい。仏前に灯火を灯し、仏に供えたもので、中国から仏教とともに伝来したという。平安時代になると、寺への献灯だけでなく、神社の献灯にも灯籠が用いられるようになったという。

このことから、出雲大社や松江市八雲町の熊野大社のように、延喜式に残る古い神社には、境内に灯籠がないが、江戸時代に建てられた県内各地の八幡宮や江戸時代に隆盛を誇った寺院には、多くの石籠が配置されていることが、理解できるのではなかろうか。

では、日本の灯籠の原点である、中国の灯籠とはどんなものだろうか。中国の庭園や寺院を訪れたことはあるが、日本の石灯籠な見あたらない。中国の仏教寺院は、写真のように線香を供えるものはあるが、日本で多く見られる石灯籠は見かけなかった。中国では、仏に献灯する方法としては、燭台(ろうそく立て)で仏前に灯明しており、仏閣の外で献灯することは少ない。



一畑薬師参道 献灯のための灯籠群



中国 寧夏回族自治区の仏教寺院

3 , 石灯籠の「用と美」とは



出雲文化伝承館 露地庭

日本庭園に石灯籠が最初に取り入れられたのは、茶庭であるという。室町時代、茶道が確立し、照明と添景のため、路地に取り入れられるようになってからだという。茶庭から始まった石灯籠は、「用と美」の兼用で用いられていたものが、他の様式の庭園にも用いられるようになった。その後、「用」ではなく、単なる装飾物として使われるようになり、江戸時代以降、書院式庭園などに石灯籠が多用されていった。このことから考えると、室町時代に整備された雪舟庭園に石灯籠がないのは、当然であろう。

4 , 出雲流庭園における石灯籠

松江、出雲は茶所で、江戸時代には武士から庶民まで茶会を楽しんでいたといわれる。そのため、多くの茶室が建てられ、その周りに茶庭が整備された。そこには、夜の照明として、また、茶庭の添景として、出雲地方特産の波多みかげや来待石を加工した石灯籠が配置されたのであろう。



では、なぜ、茶庭(露地)には石灯籠が、「用」として必要だったのであろうか。夜の茶会は、茶道では、「夜会」という、夕暮れ時から行われた。

炉の季節、冬至に近い頃から立春まで行われることが多く、午後5時からの案内で、露地では、灯籠や露地行灯に火をともし、客は手燭で足元を照らしながら、茶席に進んでいる。灯籠は必須であった。



松江市万寿寺
での夜の茶会

5 , 地域資源としての出雲流庭園

島根県には、多くの隠れた名庭園がある。これらは、我が県の貴重な地域資源であり、これらを活用し、この地域が持続的に発展するための素材として活用することが、大切である。

今年度の研究活動では、代表的な出雲庭園を訪問した。そのすべての庭園に添景として配置されている石灯籠に着目し、単なる「美」だけでなく、火をともし、夜の出雲庭園を楽しむための「用」の機能を復活できないだろうか。

今回は、アメリカの「journal of Japanese gardening」でも高い評価を得ている康國寺で禅庭の灯籠に、ろうそくをともしたが、来年度は、他の庭園にも協力を得て、夜の出雲流庭園の魅力を再発見していきたいと思っている。



ろうそくをと
もした石灯籠



平田 康國寺 庭園